主体的にコミュニケーションを図ることができる子どもを育む外国語科指導
～効果的にＩＣＴを活用し、ＡＬＴと連携したホンモノの言語活動を通して～

熊本市立力合小学校　教諭　横手佳菜子

要約

子どもたちが、主体的に英語でコミュニケーションを図るために、効果的に ICT を活用し、ALT と連携したホンモノの言語活動を通した授業を実践した。具体的には、国際交流会や各単元のプロジェクトを子どもたちと共に考え実施した。目的・場面・状況等に応じて、情報や自分の考えなどを形成、整理、再構築することができ、英語が伝わる喜びを感じることができる子どもが多かった。本研究を通し、ホンモノの言語活動を行うことで、子どもたちが主体的にコミュニケーションを図ることができ、その結果、英語を好きになる子どもが増えることが明らかになった。

＜キーワード＞　主体的　ホンモノ　ＩＣＴ活用　ＡＬＴとの連携　伝わる喜び

１　はじめに

（１）主題について

外国語のコミュニケーションにおける「見方・考え方」は、「外国語で表現し、伝え合うため、外国語やその背景にある文化を、社会や世界、他者との関わりに着目して捉え、目的・場面・状況等に応じて、情報や自分の考えなどを形成、整理、再構築すること」である。予測困難な時代に、いかにして子どもたちが well-being（持続可能な幸せ）を感じながら生きていけるのか。VUCA 時代の今、多様性を受け入れ、他者と関わり、お互いの考えを伝え合うコミュニケーション能力が、これからの子どもたちに必要な力だと強く感じる。

本研究では、ICT を活用し、子どもたちが主体的にコミュニケーションを図ることができる外国語の授業を目指し実践をまとめた。山田（２０１８）は、本当の自分の考えや気持ちを表現することが重要だと述べている。ホンモノの言語活動とは、子どもたちが本当に「伝え合いたい」と思える言語活動、また間違えながらも考えを再構築し、「伝わった」喜びを感じられる活動である。私自身、アメリカの大学で応用言語学を学んだ。英語が伝わらず苦労した思いも、英語が伝わった感動も、鮮明に覚えている。自分の本当の考えや気持ちを伝え合い、伝わった喜びや感動を子どもたちと共有したい。

様々な教育活動を行っていく中で、効果的な ICT 活用や ALT との TT を通して、ホンモノにこだわった言語活動を行い、子どもたち自らが、目的・場面・状況に応じて自己選択、自己決定し自分の考えを粘り強く再構築できる外国語科指導を目指し、主題を設定した。

（２）課題と目標

私は、現在外国語専科として５～６年生の外国語科の授業を２校担当している。校内では外国語科主任、国際教育・ALT 担当として国際教育の普及に取り組んでいる。これまで１０年間中学校で英語教諭として教鞭をとってきた。言語活動を中心に授業展開してきたつもりだが、英語嫌いを作ってしまうことが最大の悩みであった。その理由の１つには、活動がホンモノとは言えないものもあり、反復練習や暗記学習など、自らが学びとることのできる授業ができていなかったからだと反省している。小学校教諭になって３年目、現在も悩みがつきない日々が続いている。本研究の課題として、①子どもたちの英

語を使う必然性②ICT の活用方法③英語に触れる機会の少なさ、の３つを挙げる。

１つ目に、子どもたちが英語を使って言語活動を行う必然性を上手く作れておらず、なぜ言語活動を行っているのか、だれに対して伝えるものなのか、目的をきちんと把握できていないことで子どもたちが主体的に言語活動を行うことができていない。また、単純に授業に興味を持てない子どもや、参加しない子どもたちも少なからず在籍している。子どもたちが目を輝かせて授業に参加できるにはどうしたらよいか。全ての子どもたちに、英語が「分かった、伝わった」喜びを感じてほしいと思っている。

２つ目に、ICT の活用は、授業の中心になってきているが、言語活動の際本当に必要なものなのか、見極めが必要になってきている。誤った使い方で授業の妨げになる場合もあり、多くの失敗例もある。タブレットの使用意図や目的をはっきりさせる必要があると考えた。

３つ目に、英語に触れる機会のない低学年の子どもたちを含めて、授業以外で英語に触れる機会の少ない子どもたちに、もっと英語に触れる、英語を使える機会を作るためにはどうしたらいいのか。その解決法の１つとして、ALT との連携が不可欠であると考えた。

以上の課題を踏まえ、目標項目を**①ホンモノの言語活動　②効果的な ICT 活用　③ALT との連携**　の３点に定めた。１つ目にホンモノの言語活動を行うことで、子どもたちの英語を使う必然性を作ることができる。授業をデザインする際に、バックワードデザインで単元ゴールを子どもたちと共に考える機会を作った。なぜ言語活動をするのか、という必然性や切実性を追い求めることでよりホンモノの活動に近づけることができる。２つ目に効果的に ICT を活用していくことで、子どもたちの言語活動をよりホンモノに近づけていくことができる。また、子どもたち同士、子どもたちと ALT、教師をつなぐ役割としても期待できる。３つ目に外国語の授業をする上で、ALT との連携は非常に重要な役割だと言える。ホンモノの言語活動を行うことに加え、外国語におけるその背景となる文化を ALT との関わりを通して理解する事ができる。ALT との関わりの機会を、授業のみならず、学校全体で取り組むことができれば、低学年の子どもたちを含め、全ての子どもたちが英語に触れる機会をより多く生み出すことができる。

本研究では、以上３点を中心とした課題解決に向けて目標を定め、これまでの様々な取組の教育実践を行ったことについてまとめた。

２　研究の実際

（１）speaking test　スピーキングテスト

昨年度の取組で、中学校で１０年ほど前から実施されている ALT と行う speaking test を小学校版に難易度を下げて行った。小学６年生を対象に、卒業前の２月に実施した。私は昨年度、３年生の担任をしていたので、総合的な学習の時間の取扱いで６年生に関わらせてもらうことになった。校区である力合中学校と連携を図り、相談しながら計画を立てた。まず、実施前に自分でトピックを選び、既習表現で５～７文の作文を書き、ALT の先生への質問を１～２つ考えておく（図１）。スピーチを行う際の資料として、事前にタブレットでプレゼン用の資料を作成した。スピーキングテスト当日、子どもたちは１対１で ALT へタブレット資料を見せながらスピーチを行い、ALT へ質問をしたり、ALT から作文に関連した質問をしてもらったりしながら、会話を行った（図２）。５名の ALT を他校より招待し、１クラス約４０名の児童を５班に分け、ALT１名につき８名担当してもらい実施した。児童１人あたり２～３分で行ったので、２０分程度で終了し、子どもた

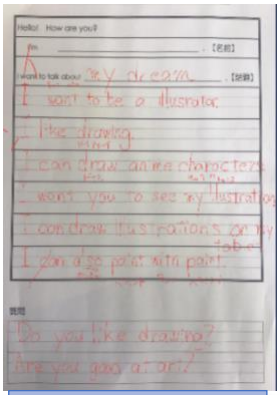

図１　原稿

図２　会話の様子

ちは、ALT よりサイン入り修了証を受け取った。終了後、ALT へ質問したり、ALT より全体へスピーキングテストについてのコメントをもらったりできたので、大変有意義な時間になったようだ。

本活動では、実際に ALT と１対１で会話をするという貴重な機会を設定したことが、子どもたちにとってホンモノの活動になり、さらに自己調整しながら主体的に会話を続けることができ、伝わる喜びを感じることができる活動になった。ALT と事前に打ち合わせを行うことでスムーズに実施することができた。ALT への事後アンケートも Forms にて実施し、多くの ALT より子どもたちのコミュニケーションを図る態度が素晴らしかったなど、高い評価を得られ、実施する価値を見出すことができた。

また、本年度２月に本務校・兼務校の両校で実施予定にしているスピーキングチャレンジでは、以下のようなルーブリック評価表を作成した（表１）。ALT への綿密な打ち合わせを行うことによって、評価も可能だと考える。中学校では実施開始から約１０年が経過し、ALT との１対１の会話の機会は今や当たり前になってきている。そこで私は、中学校版のテストを元に、小学校でも ALT との１対１のスピーキングテストの機会をスタンダード化できないだろうか、と模索している。小学校版のスピーキングテスト実施計画やテスト形式、ルーブリック評価表など事前に準備物を作製しておくことで、実施可能ではないだろうか。熊本市の全ての小学６年生に１対１で ALT と会話ができる機会を作れないか、積極的に実施できるよう携わっていきたい。

【表１　ルーブリック評価表】

観点	A　十分満足できる	B　おおむね満足	C　努力を要する
知識・技能	既習表現を組み合わせ、内容を膨らませながら話すことができた。	学習した表現を適切に使い、内容について話すことができた。	一人では、学習した表現を適切に使うことができず、内容について話すことがまだ難しい。
思考・判断・表現	内容について、相手の反応を見ながら表現に工夫を考えながら会話を継続することができた。	例文を参考にしながら内容について発表したり、会話をしたりすることができた。	一人では、例文を参考にしながら内容について発表したり、会話をしたりすることがまだ難しい。
主体的に学習に取り組む態度	相手に伝わるようにプレゼン資料の提示方法を工夫したり、相手の反応を見たりしながら内容についてわかりやすく伝えることができた。	プレゼン資料を見せながら、内容についてわかりやすく伝えることができた。	一人では、プレゼン資料を見せながら、内容についてわかりやすく伝えることがまだ難しい。

本年度、２月にスピーキングテストを実施するにあたって、ALT よりアドバイスなど事前アンケートを Forms より実施し、貴重な意見をいただいた。多くの ALT が「暗記させるのではなく、既習表現で自分の興味を持っている内容を、できるだけ自由な会話をさせた方がよい」という意見を書いていた。自分の言葉で、自分の思いを伝えることが大変重要であると感じた。また、アイコンタクトの重要性やタブレット資料の使用などをアドバイスしてもらった。ぜひ、貴重な意見を参考に計画を立てたい。

（２）English time　イングリッシュタイム

本校では、月に１度 ALT と共に English time を実施している。コロナ前の令和元年度（２０１９年）は、昼休みに体育館に集まり 1 年生から６年生まで参加したい子どもたちが集まり英語遊びを行った。ALT と実施計画を立て、アルファベット人文字やビンゴ大会、英語の本の読み聞かせなど様々な活動を実施した。特に外国語の授業のない１～２年生にとっては、英語に触れる良い機会になった。２０１９年の９月にはシンガポールより新しい ALT の先生が来校されたので自己紹介サイン会を実施した。多くの１～２年生は初めて ALT と１対１で話す経験を持つことができた。

令和２年度はコロナ禍により、体育館などに集まって活動することが困難になった。しかし、English time を継続する方法を模索する中で３月から５月までの休校中に動画配信を行った経験を活かすことができないかと考えた。休校中は、３年生の外国語活動の自己紹介や理科の種まきの様子について学年部で動画作製を行った。Youtuber になったつもりで、楽しく動画を作製し子どもたちにロイロノートを通して配信した。ALT にも協力してもらい、ビンゴの動画も撮影し、動画によるビンゴゲームの活動も行った。問いかけや間を上手く使うことで対面授業と同じようにゲームを楽しむことができた。その経験を活かし、ALT と夏休みに動画を撮影した。自己紹介や好きなものの言い方をはじめ、じゃんけんゲームや学校案内など様々な動画を作製した。その動画を学級裁量で見てもらうことにした。効果的に ICT を活用することで、コロナ禍であっても English time を継続することができた。しかし、決まった日時を指定しなかったので、時間の確保や周知の方法などの課題が残った。

令和３年度は課題を踏まえ、月に１度朝自習の時間を使用し全学級にグループウェアのメッセージにて周知徹底に努め、再度動画による English time を実施した。４月は新しく赴任した本校校長にも協力してもらい、自己紹介動画を作製した。1 学期は ALT と共に目的・場面・状況に応じて使える英語表現を選び、月ごとの動画を指定した時間に各学級で観てもらった。オリンピック・パラリンピック目前であった１学期最後の７月の会には、次の（４）で詳しく説明するが、６年生が外国語の授業で作製したオリパラ CM 動画を視聴してもらった。同じ小学生の動画は大好評で、何度も何度も視聴した、など嬉しい感想ももらった。２学期からは、新しい ALT が来日した。そこで、２年前にも実施した、新しい ALT の先生との自己紹介サイン会を再度行った。低学年の子どもたちはもとより、授業での触れ合いのある 3 年生以上の子どもたちも、ALT と１対１で目を見て会話をする機会は、大変貴重な経験である。また、高学年の児童は低学年のお世話をしてくれた。授業に意欲的でなかった高学年児童も低学年に英語を教えていたことに大変驚き、価値のある活動であった。

人文字アルファベット

英語動画

サイン会

図３　English time の実践例

（３）International Day　国際交流会

昨年度から本校は、学期に 1 度他校の ALT を５～６名招待し国際交流会を行っている。1 年生から６年生まで支援学級を含め、全学年が 1 年に 1 度は数名の ALT と触れ合えるよう機会を設けた。ALT と綿

密に打ち合わせを行い、各学年の子どもたちの発達段階に合わせた活動を考え（表２）、またコロナの影響もあるので、密にならないよう細心の注意を払い、事前打ち合わせを繰り返した。時にアイディアを共有するのに、無料通信アプリ LINE 等を利用することも多々あった。

【表２　国際交流会の例】

学年	時期	内容
支援学級	７月	体育館にて各国の遊びを通した交流
１年生	２月 ７月	体育館にて各国の食べ物について話を聞いたり質問したりする交流 教室にて英語の歌遊び
２年生	２月	体育館にて各国の食べ物について話を聞いたり質問したりする交流
３年生	１１月 ２月	体育館にて各国の遊びを行い、教室にて熊本の食べ物についてクイズ 教室にてキーノートを使った３ヒントクイズ大会
４年生	１１月	教室にて各国の学校や持ち物などを聞き、日本の学校について紹介
５年生	１２月	教室にて各国の町紹介を聞き、自分たちの行きたい国紹介
６年生	７月 １２月 ２月	体育館にて各国の行事を聞き、各教室で日本の行事紹介、七夕お願い 教室にて各国の町紹介を聞き、キーノートを使用し、熊本紹介 ALT と１対１のスピーキングテスト（スピーキングチャレンジ）

図４　ALT との交流

図５　交流会の様子

低学年の子ども達は、「先生たちがお父さん座りをしていた！」や、「(前任 ALT) シンガポールと違うね！」など驚いたようだった（図４）。実際に触れ合うことで、文化の違いに気づいたようだった。また、現 4 年生は、昨年度から計３回の交流会を経験しているが、全体的に会話に積極的で、普段発表などあまりしない子どもでも、目を見てしっかり ALT と交流していた事を、学級担任が驚いていた。

本年度の５～６年生は、本務校・兼務校の両校で交流会を実施した。特に兼務校では初めての試みであったため、入念に実施計画を行った。ALT の人数や待機場所、時間割など担任や管理職とも打ち合わせを行った。また、両校とも事前に ALT への連絡事項の詳細を文書にまとめ、指導課を通して伝えてもらった。兼務校の子ども達は特に初めての経験で、ALT を目の前に、目をキラキラ輝かせて交流していた（図５）。

金森（２０１９）は、国際理解教育は「外国語や異文化の知識のみならず、コミュニケーション能力、特に人と触れ合う体験及び自己表現活動を育成するための指導を通して、自尊心・他者尊重の態度も育てることが大切」だと述べている。交流会は、ホンモノの体験であるからこそ感動や伝わる喜びを感じることができるのだと確信する。また、どうしたら伝わるのか、粘り強く自己調整しながらコミュニケーションを図る姿や、友達と助け合う姿も多く見られた。ALT への事後アンケートも実施したところ、多くの ALT が国際交流会を行うことは子どもたちにとって重要であると答えた。また、ALT の回答の中には、子どもたちの ICT スキルを驚く声や、プレゼンテーションで作製した熊本紹介や行きたい国に関するスライドを大変楽しんだという感想が寄せられた。

国際交流会を実施している小学校もあると聞いているが、国際教育担当者次第という現状があるよう

だ。各学校の担当者が事前打ち合わせなどをしやすいような定型文などを作製しておくと、多くの学校でも交流会が実施できるのではないかと考える。熊本市では、ALT の多数配置リクエストをすることが可能であるので、その機会をぜひ有効に活用したいと考える。

（４）The Olympic and the Paralympic CM　オリンピック・パラリンピック CM

６年生の Unit３　What do you want to watch？では、オリンピック・パラリンピックの競技について競技名や見たい競技について尋ね合う文の取扱いがある。６月後半から単元に入ったが、本年度東京でオリンピック・パラリンック競技が開催されるというのに、全くの盛り上がりを感じなかった。それというのも、コロナ禍で開催さえも危ぶまれていたから仕方がない。本来であれば、オリンピック・パラリンピックの自国開催という一大イベントであるのに、開催まで１か月を切っても子どもたちが関心を持てないことが、大変気の毒であった。そこで、単元の１時間目にオリンピック・パラリンピックの CM 動画を２本見せた。すると、子どもたちは、少しずつ高揚感を感じることができたようだった。そこで、単元のゴールを子どもたちと考えるにあたって、提案をした。「オリンピック・パラリンピックをみんなが見たい！と思えるようにするためには、どうしたらいいだろうか？」すると、子どもたちは、「オリパラ CM を作ろう！」とアイディアを持ち、CM 動画を作ることに意欲的になった。

言語能力のみならず､教科科目やテーマの内容理解と認知力を高める教育CLIL(Content and Language Integrated Learning:内容統合型言語学習）という英語学習法が注目されている。自分たちの興味のあるスポーツ選手や競技を選び、調べ学習を進めていくことは CLIL の視点からも有効だと考える。 ８時間扱いの単元のうち、１時間目に単元ゴールを設定し、CM 作りに必要な表現を少しずつ学び、言語活動を通して習得していった。紹介したい、または、興味のある競技をそれぞれ選び、グルーピングを行った。そして、ロイロノートのシンキングツールを使用し、動画を作る競技や選手を選び、紹介文や動画の構成を考え撮影していった（図６）。子どもたちが、CM を作るイメージを持ちやすいように、始めに私が作った CM 動画を見せた。

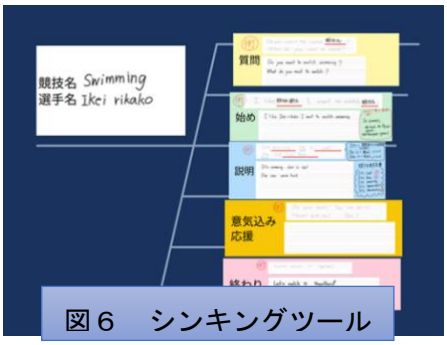

図６　シンキングツール

動画撮影に２～３時間程費やし、夏休み前にできあがり、学級ごとに視聴した。表現はさることながら、子どもたちの演じる力、そして ICT 活用力は予想をはるかに超えていた。動画編集アプリの iMovie や Clips、ロイロノートなど自分たちの使いやすい動画編集アプリを使用したが、様々なアプリを併用し作っているグループもあり、ICT 支援員も驚くほどの機能を使いこなしていた。

動画を見終えた際に、実際に見たいと思った競技の投票を行った。それぞれの学級から上位２チームを選び、（２）でも前述した、English time で全校児童へ配信した。６年生のみならず、全学級へオリンピック・パラリンピックの啓発ならびに、英語の表現に触れる機会になった。

（５）Elementary school interaction　５年生　小・小連携

２学期の分散登校明けに、５年生を対象とした本務校と兼務校の動画交流を企画した。Unit5　He can run fast. She can do *kendama*. の単元で can や He,　She などを取り扱う。そこで、　“He　can　～. She can～.”の文を用いて、クラスの友達紹介や先生紹介を通して、お互いの学校紹介動画を作製し交流できたら、主体的な活動になるのではないかと考えた。まず、単元

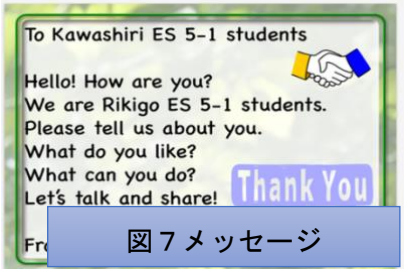

図７メッセージ

の１時間目にお互いの学校からのメッセージが来ているという紹介を行い（図７）、お互いの学校を紹介し合おうと子どもたちと考えた。驚く子どももいたが、学年３クラスを各クラスで交流することに、大変意欲的な子どもが多かった。どんな交流をしたいか尋ねたところ、「一緒にドッジボールをしたい、リレーをしたい、Zoom 交流をしたい。」など様々な意見が出た。今回は、動画を作製し送り合うことになり、まずは挨拶動画を撮った。

２時間目に、お互いの挨拶動画を見て、実際に友達を紹介する can を使った学習に入り、３時間目に構成を考え、４～６時間目で表現の学習並びに動画撮影を行った（図８）。７時間目にお互いの動画を鑑賞したが、子どもたちは食い入るように動画を楽しんで視聴していた。そして、ロイロノートのアンケート機能を使用し、活動に関することや動画視聴後の感想などを書いてもらった。８時間目には、アンケートをもとに感想の共有を行い、お互いがお互いを褒め合い、表現の仕方や明るい雰囲気など良いところをたくさん気づいているようだった。学習のまとめとして、お互いが書いた友達の紹介文を誰でしょうクイズにして、誰の事を紹介した文なのか、線結びで答える教材を MetaMoJi で作製した（図９）。子どもたちは、友達が書いた文章であるという事と、誰なのかを当てたい一心で、大変興味関心を持って取り組むことができた。驚くことに、あまり授業に興味関心を持てない子どもが、テレビ画面を食い入るように見つめ、誰だろう？と必死に文章を読む姿があり、効果的であった（図１０）。アンケートでは、９９％の子どもがまた交流をしたいと回答した。

図８　撮影の様子

図９　MetaMoJi

図１０　子どもの様子

（６）This is my town project　６年生　ユニット６　わが町紹介プロジェクト

２学期も後半にさしかかる１０月中旬、新しい ALT の先生がアメリカより来日された。２週間の隔離期間や、熊本での研修が予定されていて、本校への勤務は 11 月の中旬であった。来日されてすぐの隔離期間中、Web 会議アプリ Zoom を使用して、Zoom ミーティングを実施した。その際、６年生の次の単元が我が町紹介であることを説明し、先生からビデオレターをもらえないかと尋ねると、快諾してもらえた。内容は、先生の簡単な自己紹介とアメリカ紹介、そして、最後に熊本について教えてほしいという今回の単元の目的・場面・状況を設定してもらった。前述したように、CLIL の学習形態をとることにより、学習内容の理解に重きを置くことで、学習者のコミュニケーション能力の育成や、学習者の文化、相互文化の意識を高めることができる利点がある。

いよいよ単元の初日、子どもたちにある人からメッセージをもらっていることを伝えた。子どもたちは興味津々で画面に釘付けであった。誰だろう？と必死に聞き取ろうとする姿も見られた。言葉を断片的に聞き取り、理解しようとする子どもの姿が、まさしく外国語の見方・考え方にもある「情報を形成、整理、再構築すること」であると感じた。　“I’m a new ALT.”と聞き取れた子どもたちが、「新しい ALT の先生だ！」と分かったようだった。

メッセージをもらった子どもたちは、プロジェクトに大変意欲的で、すでに熊本城を紹介しよう、阿蘇がいいかな、など思い思いにイメージを膨らませることができていた。ロイロノートで紹介したい場所を送ってもらい、回答共有で友達同士の場所の調整などもしながら第一候補を決めた。

その後、ALT と何度か通信アプリ LINE を使用し打ち合わせを行い、勤務がまだできない時期に、子ど

もたちと Zoom でつながれないかとお願いすると、これも快諾してもらえた。６年生の３クラスが Zoom でつながる時間を２０分程度３回作ってもらった。子どもたちは事前に先生に尋ねたいことを質問シートに英語で書き、ロイロノートに提出した。子どもたちは、Zoom で画面に映る ALT を見て感激していた。画面越しに、好きな食べ物やスポーツ、行ってみたい場所などプレゼンの参考になるような情報を得るため、英語で聞くことができた。時間の関係上、全員は質問できなかったので、後日 ALT にもロイロノートに参加できるように設定し、質問に回答してもらった。

Zoom の後には、授業の中で使える表現を学び、スライドにまとめる時間がやってきた。ロイロノートのシンキングツールを使用し構成をまとめた（図１１）。まず始めに、プレゼンテーション編集アプリ Keynote を使用した天草紹介のスライドを見せた。すると、Keynote を使ってみたいという子どもも多くいたため、Keynote の簡単な使い方を説明した。基本的な説明のみであったが、子どもたちは、自分たちで操作しながら教えたこと以上の操作方法を取得し、またそれを友達同士で教え合い、高度なレベルのスライドができあがっていた。

図１１　シンキングツール

いよいよ、ALT と初対面の時間がやってきた。子どもたちは緊張した面持ちであったが、大型テレビにスライドを映し、一人一人の発表を行った。ALT は大変喜んで、子どもたちの紹介した場所に行ってみたいと評価していた。フィードバックがあるからこそ、また子どもたちが「伝わった、やってよかった」など伝わる喜びや達成感が感じられたようだった。２学期最後に（３）でも紹介した国際交流会で他校の ALT にも熊本紹介を実施した。

今回のプロジェクトは、相手が明確であるからこそ相手意識が芽生え、熊本に初めてやってくる ALT の先生に熊本の良いところを教えるという目的・場面・状況がはっきりとしていたため、子どもたちが主体的にプロジェクトに取り組めたと感じる。英語で熊本を紹介するという CLIL の視点も効果的であった。また、スライドの中に英文を入力する子どもも多くいたことから、ライティングスキルの向上にもつながる活動になり、４技能を使うことのできる実施価値の高い活動であった。

３　研究の成果と課題

（１）成果

①スピーキングテスト

スピーキングテストに対して実施前は、好意的な思いではなかった子どもが半数ほどいた。しかし事後アンケートでは、驚く回答が得られた。ほとんどの児童がまたスピーキングテストをしたいと回答していた（図１２）。事後の気持ちの変化などを尋ねた振り返りは、以下の通りである。

図１２　結果

- ○ 英語は**社会で必要**だということについて気持ちの変化がありました。**外国人の人と会話するのも大切**だと思うようになりました。
- ○ 英語は知っている**英語を並べるだけでも通じる**ことが分かった。
- ○ 今まで英語が好きじゃなかったけど、ALT の先生と話して**今までより英語が好き**になりました。
- ○ 発表が苦手で外国語の発表が楽しくないものだと思っていたけど、**今日初めてスピーチが楽しい**ことが分かった。

②国際交流会

１２月に実施した国際交流会は、子どもたちにとって予想以上に大きな影響を与えるものとなった。事前・事後アンケートで、気持ちの変化や感想などを尋ねた結果、２校とも５～６年生の英語が好きだと答える児童が増加した。５年生では**８４％から９５％**に増加（図１３）、６年生でも**９０％から９４％**に増加した（図１４）。英語が将来必要だと感じる児童がほとんどで（図１５）、さらに、交流会をまたしたいという児童はほぼ１００％に近い結果となった。また、将来英語の先生になりたい、と伝えてくれた子どもさえいた。各クラスの担任からも、大変貴重な会で子どもたちの良い経験になったと多くの賞賛の感想をいただいた。

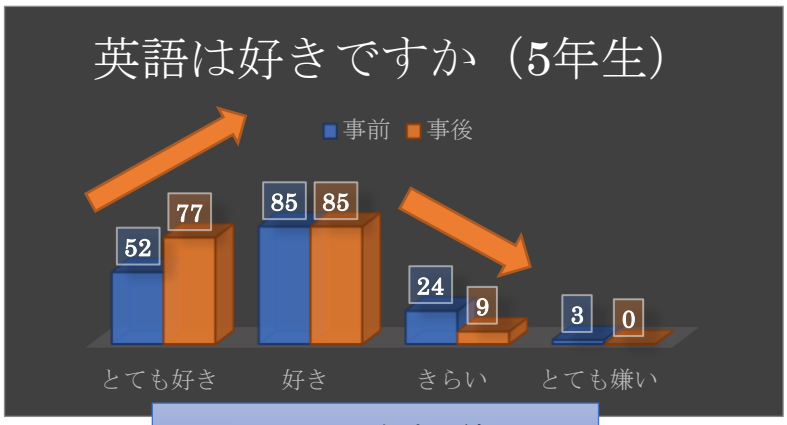

図１３　５年生　結果

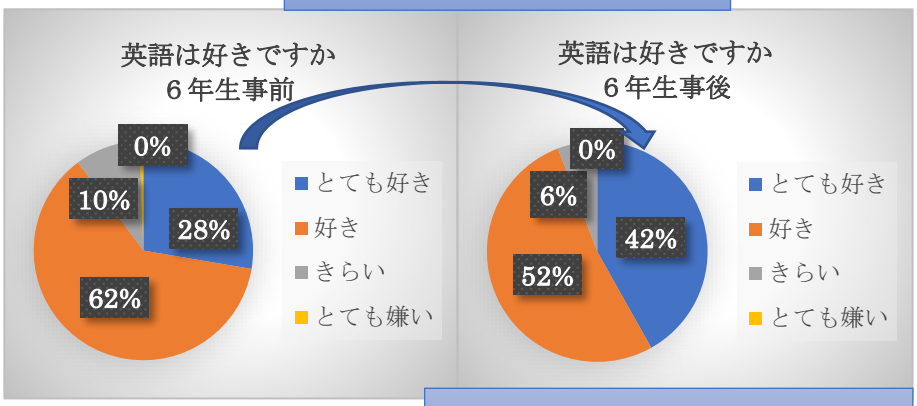

図１４　６年生　結果

子どもたちの感想や気持ちの変化についての振り返りは、以下のような結果である。

- 今まで自分が気づくことができなかったことにも気づくことができたし、知っていたことを**より深く**知ることができた。
- 将来海外に行く時に**学んだ英語を生かせる**と思うから、もっと英語をペラペラにしゃべれるようになりたいです。
- 英語で話しをして、**外国人の友達を作りたく**なりました。外国のことを**もっと知りたい**。
- **もっと英語がしゃべれたら**、いろいろなことを質問できるのになぁと後悔しているので、今度から英語の授業をしっかり聞いて**頑張りたい**です。

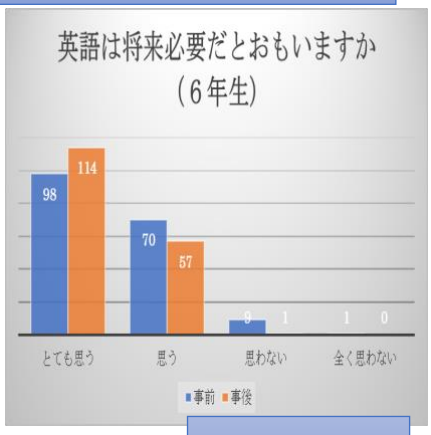

図１５　結果

③振り返りシートより

振り返りシートについての成果は、一人一人の目標を設定したことだ。Today’s goal を設定する際に、どんな風に練習したいのか、どんな姿になりたいのか、目標が一人一人違うことに気づいた。また、目標を個々に設定することは、自らが学びとるための自己決定ができ、主体的な学びにつながり効果的であった。

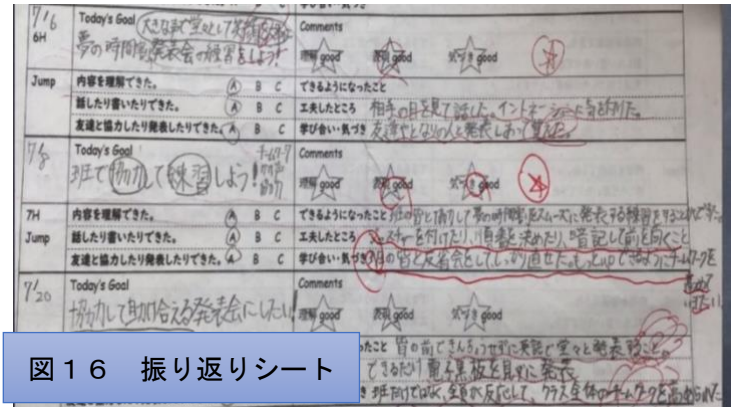

図１６　振り返りシート

④まとめ

これまでの教育実践を通して、①主体的な学び　②効果的な ICT 活用　③　ALT との連携について成果を感じた。まず、言語活動に対し、子どもたちが主体的に取り組めたことは、ホンモノの教材であったことが一番の成果だったと感じる。目的・場面・状況が明確である授業は大変効果的であった。また、CLIL を活用し、体育や社会などの教科内容を題材に言語活動を行ったことで、英語の４技能を高めることができた。次に、ICT を活用した授業で特に、ALT からのメッセージ動画や Zoom でのやり取り、また Keynote などの編集アプリを使用したプレゼンは、主体的な学びにもつながった。最後に、ALT との連携は大変重要な役割を果たした。ICT を活用することで、勤務日以外にも連絡を取り合うことも可能になり、実用性も高い。何より、子どもたちにホンモノの英語と触れ合える機会を作るためには、ALT との連携は欠かせない。本研究を通し、ホンモノの言語活動を行うことで、子どもたちが主体的にコミュニケーションを図ることができ、英語を好きになる子どもが増えると明らかになった。

（２）課題

一方で課題も残った。特に、①気持ちがのらない子どもへの対応　②振り返り時間の確保　③動画交流などの承諾書について課題を感じている。まず、英語を嫌いだと感じている子どももいる。改善策として、授業始めにコグトレや「はぁって言うゲーム」、「キャット＆チョコレート」などのゲームを取り入れた。少しでも顔を上げてほしい、楽しいと思ってほしい、そんな気持ちであった。一定の効果はあったが持続性には欠ける。どうしたら、全員参加、全員の子どもたちが主体的に学習できるか今後の課題だ。次に、プロジェクト型の授業は時間との闘いで、振り返りの時間が十分に取れないこともあった。前田（２０２１）は、「自ら学ぶ力」を育てるために、自分の学習をメタ認知するための振り返りが重要だと述べている。最後に、動画交流などをするにあたって、承諾書問題が付き物であった。一部承諾書が得られないという理由で、外部との交流をあきらめざるを得ない計画もあった。また、文科省から毎年来ている外国語の実施状況調査の中には、ICT 機器の活用について「児童が電子メールや SNS を用いたやり取りをする活動」や「児童が遠隔地の英語に堪能な人と個別に会話を行う活動」についての項目がある。この項目については、生徒指導部や管理職と連携し、組織的に改善を図りたい。

４　おわりに

小学校での３年間の実践は、外国語活動、外国語科の実践ともに大変学びの多い３年間であった。これからも、子どもたちにとって主体的な学びになるよう、ホンモノの言語活動を通した授業展開を考えていきたい。そして、全員の子どもたちが英語を好きだと思ってくれるよう、尽力したい。

５　参考文献

１）金森強　『小学校英語科教育法　理論と実践』(成美堂　２０１９年)
２）ジョン・カウチ　『Apple のデジタル教育』(かんき出版　２０１９年)
３）前田康裕　『まんがで知るデジタルの学び』(さくら社　２０２１年)
４）文部科学省　『小学校学習指導要領解説　外国語編』　（２０１８年)
５）山田誠志　『自分の気持ちを考えながら話す小学校英語授業』(日本標準　２０１８年)
６）Marianne, C.M.　“Teaching English as a second or foreign language”(USA: Heinle and Heinle Thomson learning　２００１）